Candy
in the Heart
588

僕は後悔していない

その目は彼女と同じ目だった。

僕は、そのお母さんの目の中に、
彼女の目を見た思いだった。

まったく、こわくなかった。
その時、僕の気持ちは、完全に落ち着いていた。

「信子さん、おられますか。」
僕は、落ち着いた口調で、
まっすぐに、お母さんの顔を見て言った。

瞬間、はたと、お母さんに、思案の様子が見えたが、
そのまま、黙って、家の中へ入って行った。

そして、家の中で、話し声がして、
すぐ、お母さんは、また、僕の立つ戸口へ出て来た。
日傘をさしながら、僕の顔を、ちらっと見て、
「すぐ、来まっさかい。」と笑みを浮かべながら言い、
お母さんは、門の外へと出て行った。

お母さんが門の外へ消えたころ、
家の奥から、土間でつっかけをはいて、
早足で出て来る音がした。

僕は戸口の壁に身をぴったりくっつけて、
彼女が戸口から出てくるのを待った。

彼女が戸口から急いで飛び出して来た。

萩原良昭